好日好読

「生」からみた「死」～
あるがん科学者の比較文明論

空知医師会　方波見　康　雄

読書は装丁から始まる。

この本(写真)は、Ａ５版サイズの丈を少し短くしたほどの大きさ。茜色にちかい赤い表紙に、黒い文字で題名が刻してある。白地のどのページも余白がゆったりとしている。本のこの作りと表紙の黙示録的色合いや装丁は、何を語ろうとしているのだろう。

読書はまた、目次を眺めることからも始まる。著者が語りたいメッセージが目次に示されているからだ。本書の目次の章立てや小見出しの組み立ては分かりやすい。目で逐うだけで、著者の意図や視点と構想などが、おのずと伝わってくる。

意図について著者は、巻頭「はじめに」で、あらましこう述べている。

＜アジア諸国を歩き、その日常の営みを垣間見ながら関心を抱いたのは、端的にいえば、アジアの人たちはどんな死因でその一生を終えるかという問題である。漠とした風評や過去のイメージに頼ることなく、確たる数字の裏付けをもとに、それぞれの国の人達の「生死」という、人間としてもっとも根源的な問題をとらえなおしてみようと考えたのである＞

著者のこの姿勢は一貫している。アジアの各地を訪れ、現地の人々の言葉に素直に耳を傾け、温かく柔らかな視線を注いでいる。

目次・章Ⅱ東南アジアの、カンボジアについての小見出しを見たとき、著者とのこういうエピソードを思い出した（著者は医学部同期の60年余の友人。以下、小林君あるいは彼と呼ぶことにする）。

４年ほど前のことだったと思う。彼が理事長をしている札幌がんセミナーのオフィスに訪ねたとき、めずらしくポル・ポト政権のことが話題になった。170万人にもおよぶ自国民をなぜ拷問虐殺したのか、ポル・ポトとはいったいどんな人物だったのか、現地に行って調べてみたい。どうだ、一緒に行かないかと言いながら彼は、この独裁者の肖像写真を表紙にした分厚い本を見せてくれた。

今回の著書で初めて知ったのだが、彼はこのあと、たった一人でカンボジアを訪れ、ポル・ポトが残した暴虐の傷跡を実検証している。つまり４年前からすでに、本書出版のための周到かつ綿密な構想を彼は練っていたことになる。

その小見出しの項目を引用しておこう。

・ポル・ポトによる自国民大虐殺
・拷問、虐殺はなぜ起きたか
・無気力になったクメール人
・累々と積み重ねられたヒトの頭骸骨

ポル・ポト見聞記を、彼はこう結んでいる。

＜最初にこの頭骸骨を見たときに非常に重い気持ちに駆られた。二度目は比較的冷静だった。ふと博物館の陳列品みたいに眺めている自分に気付いた。人間の感覚は極限状態ともいうべき残虐場面を見聞しても、やがて麻痺していくものなのか。「こんなことではいけない！」。私はそんな自分を許せない気持ちに駆られるのだった＞

科学も医療も、ますます専門細分化しようとしている。「総合医」という衣装をまとった「専門医」すら登場しようとしている。「専門」は、得てして視野を狭くする。首をかしげたくなる傾向だ。

国際的にも高名ながん科学者・北大名誉教授小林君の視野は広い。彼のこのような感性と想像力の豊かさと緻密な科学的実証姿勢と自戒力の結びつきは、３・11の悲しみを経験した同時代人として大いに参考にしたい。想像力を欠いた原子科学「専門家」の醜態を、医療者は後追いしてはいけないのだ。

アジアは広大だ。国や地域それぞれが政治形態も経済発展も伝統文化も宗教も世俗習慣も言語も、ことごとくが趣を異にする。医療のレベルや仕組みにも大きな格差がある。

「生」の姿に、このような違いがあれば、「死」も当然のこととして様相を異にする。

ここから彼は視点を大きく広げ、アジアとの比較の意味で、アフリカ大陸のジンバブエや南アフリカ共和国、ロシアとオーストラリアにまで実地検証の旅を試みている。その現地で繰り広げられている多様な生活と「死」への考え方の相違の具体的な叙述は、さながらそのままスケールの大きな比較文明論となっている。音楽と美術を愛する科学者小林君が奏でるデュオの深く静かな旋律を聴く思いで読んだ良書であった。

日本の医療現場ではいま、胃ろうなどの経管栄養をめぐり、厳しい選択が迫られている。いまなお「感染症」に苦しみ脅えるアジアの人々の目に、このような日本の現状はどう映るか。「死生論」を講壇から論ずる以前の黙示録的社会問題として省察するためにも、本書の熟読を薦めたい。